

## 第9号 資源工学会々報

進展をせまられる日本の  
資源対策

伏見 弘

自国経済の保護のためとはいえドル問題という経済的な圧迫が、伸展しつつある日本産業に対し本年8月中旬以降突然のしかかって来た。一方中共との政治的取引も表面化して日本としては経済政策についてとまどはざるを得ない立場に追込まれている。

我々資源の開発や生産の補助的立場にある者としては、国際的技術レベルにおいて国内の生産が進展することを期待するばかりでなく、海外に協力して安定した資源確保を打出すのが日本の将来の発展、繁栄につながる道であろうと考えられる。

したがって、当学科の使命としてはますます海外鉱の開発、精製などについて技術的援助をすることを第一義的に心にふまへた教育をほどこす必要があると思われる時代になってきた。

このような立場で外国の資源を開発し、支援すると共にその生産量の余剰分を日本に持込むことを考え、単に机上の青写真による計画ではなく、具体的に可能な方法で、相互の発展につながる資源対策を、政治をはなれてとらねばならない時期にきていると思う。日本経済の生きる路はこの方向あるのみであろう。諸兄の一層の御自愛と御活躍をお祈りする次第です。

## 徳永先生未亡人逝去

中野 実

徳永先生夫人逝去の知らせを受けたとき、私の脳裡には忽ち先生の御顔がハッキリと浮び出た。学生時代から永く大へん御世話にな

った先生のことを実は忘れていたのである。夫人には先生御生存中ときどき御眼にかゝったことがあるが、代表的な明治、大正時代の賢夫人型で、端正な美しさ、眼は常にやさしく輝いていたが口数少く何となく近づきがたい感じであった。これに反して夫君たる先生は早口で、思ったことをペラペラしゃべるザックバランな持ち味の学者で、およそ似た者夫婦とは関係ない様に思われた。学生時代のある時図書室で先生に御眼にかゝると『君の地質学の答えは非常によくできた。100点やると俺と同じ能力ということになるから95点つけといたよ』ハハハハと笑われた。夫人逝去から私には先生の思い出ばかり出てきて限りが無い。なき夫人の御冥福を祈ると共に先生について改めて書きたいと思う。

## 三宅当時先生と早稲田精神

森田 豊夫

三宅当時先生は昨年3月27日に亡くなられました。大往生であったということです。

さて、その三宅先生を御存知の方はだんだん少なくなってきました。資源工学科の前身である探鉱冶金学科を大正6年に卒業され、その後大学に残られて昭和13年までの約22年間を学生の指導に専心された方で、いわば早稲田のハエヌキの教授でした。

三宅先生には、お酒にまつわる話題が豊富なことは御存知の方も多いと思いますが、私もお酒と三宅先生の思い出をお話することにしましょう。

私は、先生が学校をおやめになり、先生の講義を不幸にして一年ちがいで聴講できなかったのです。先輩諸兄から先生のお噂はかねがね伺っており、丁度北海道の上歌志内炭鉱

で実習をいたしましたので、その帰途是非先生のゴセイガイに接したいものと、一年上の磯野三雄先輩と二人で、当時先生が鉾山長をしておられた北ノ王鉾山に見学かたがた御指導を仰ぐべく参上いたしました。暑い夏の日盛りのなかで、露天採掘の砂金の腕がけを見せていただき、この分は25 $\frac{9}{16}$ とか、あの分は18 $\frac{9}{16}$ とかお教えをいただいた次第です。夕方になってルベシベ温泉に御案内をいただき、学生の分際にもかかわらずお酌ガールなどの歓待をうけ、先生の大サービスに鉾山長の威力の絶大さに敬服したことでした。一夜あけて、遠軽まで「そば」を喰べにいかうと連れていかれたのが野付牛の駅前のカフェーで、昼間からビールを飲みはじめることになりました。丁度隣席にいたのが電力会社の人達とかで、「これから、一厘か二厘の電力料金の値下げ交渉をするから君達は三時ごろの汽車で帰れ。それまでどこかで飲んでおれ」との有難いご託宣でした。私達は、映画を見に行くには時間がまずいし、どうせ若い女の子が一緒ならと河岸をかえ、先生が一銭、二銭の問題でなく一厘、二厘の問題で奮闘しながら私達学生にご薫情を賜ったことに感謝しつつ大いに飲みました。こちらは最高の環境条件で、若いゲイシャガールと角帽のオニイサン二人ですから、すっかりリラックスして三時の汽車なんかすっぱかしてしまいました。六時半の最終列車にやっと間にあい、ホッと一息ついた時、三・四人のヨッパライの団がガーガー、ワイワイが鳴りたてながら列車になだれこんできました。

見ると、先生が左右の腕を支えられて入ってこられたのにはオドロキでした。私達も、早選手つだって二等車にお連れしたわけです。その時、私達への大声一番は、「君達今まで女の子と何をしていたか」とのお言葉でした。私達は、「先生が汽車に乗りこまれるのを確認しなければ帰れませんので駅でお待ちしていました」とかなんとかいったものです。し

かし先生は、「何を」していたかをしつこくたずねられ閉口して三等車に退散しました。今から思うと若い学生への親心の発露かと考えられ感謝の気持ちが湧いてきます。二等車に同車していた人品卑しからぬ二人の紳士(当時北大教授のF氏、地質調査所のU氏)が先生の酔態を見て、「三宅さんはだらしないね」などと私達に話しかけてきました。ところが、そのなかの一人が翌日の夕方、はからずも同じような酔態を演じられ、それを拜見する光栄に浴しド肝を抜かれたものでした。

先生が私達若い学生に対して、「先生」、「先輩」、「紳士」など畏敬している人達でもこういう一面があること、すなわち「人間」であることを身をもってお示し下され、「人を見る目」を大きく開かしていただいたわけで、このことは今もって肝に銘じて忘れることができないばかりでなく、心から感謝しています。

先生は、早稲田の野性精神を身につけていた方だったと思います。ワセダスピリットを身につけていた先生。スピリットはアルコールですからね。私の「心眼」を開いて下さった三宅当時先生はもうこの世にいられない。嗚呼。

#### —— 最近キューバを訪ねて ——

伏見 弘

筆者は最近キューバ政府の招きにより、鉾産資源の開発および処理に関する技術援助のため同国を訪ねる機会を得た。滞在期間は、9月25日(土)東京を発ち10月11日(月)にスペイン経由帰国するまでの約2週間に過ぎなかったが、その間に知ることを得た同国の資源開発の実情について以下に簡単に報告する。

3年前筆者は、ヨーロッパで開かれた国際選鉾選炭会議の帰途同国に立寄り、約2週間潜在して国内各地を回り、鉾産資源開発の事情を視察したことがある。その概要については既に選炭誌に報告した通りであるが、今回

の招待のねらいは、その時日本の技術をもって援助しようと考えられる事項について同国政府宛報告した内容の一部につき協力を求めるところにあったものようである。現在キューバにおいては、工業の飛躍発展を目指すことが重要な国策となっており、したがって筆者との質疑に当たった担当官の真剣さは非常なもので当方がその回答にとまどう場合もあるほどであった。特に35～40才前後の比較的若い年齢層の人達の研究態度は熱心で、研究の結果はただちに実施に移され、その成果には目をみはるものがあった。

キューバの鉱産資源として、まず指を屈しななければならないのはニッケル鉱で、綿密な鉱床調査が東部のNicaro, Moa等の地域で進められていて、埋蔵量計算はすでに一応終わっているが、鉱量は無尽蔵といってもよいほどである。Laterite, Serpentineなどの処理上の問題点について現在種々論議がおこなわれているが、電力の供給コストの問題が解決すればニッケルの取得は容易であろう。

そのほか、銅、鉛、亜鉛等の鉱体もごくぞく確認されつつあり、それらの処理施設も逐次拡充されつつある。またクロム鉱の開発もおこなわれてきている。

現在、キューバにおけるニッケル鉱の処理量は年間約200万t、金属分にして100t/日といわれている。またコバルトの生産量は金属分として20t/日であり、これらの生産方式はいずれも湿式によっている。これらの処理液にはFeが55%程度ふくまれており、今後の開発原料として期待される。

硫化銅鉱は浮選によってCu 30%程度の精鉱としており、Sは硫酸原料になっている。この辺の詳細については、最近発行されたアトラスのキューバ版に明らかである。

目を各種の研究用機器、測定用機器に転じてみると、それらの製造はほとんどおこなわれておらず、英、仏、オランダ等からの輸入に頼っているのが実情である。

以上、前回のキューバ訪問と今回のそれとの間には約3年の時間が経過しているが、これら2回の訪問における各種の見聞を比較してみると、あらためて、キューバが若々しいエネルギーをもって急速に発展しつつあることを痛感した。

帰路はからずもモロッコのラバト、カサブランカ等に立寄り、砂漠地帯の観光をおこなうことができ、さまざまな収穫を得たが、それらについては別の機会に御報告することにする。

## インドたれあるき

平塚 実

昨夏7～8月にわたって、印度北西部パキスタンとの国境に近いジャンムカシミール州の州都スリナガールのカシミール大学における印度応用統計学会への参加と、西ベンガル州カルカッタにあるISI（印度統計研究所）を訪問し、その間約2週間にわたって酷暑のインド大平原を何というアテもなく、野糞、山糞、川糞とたれ歩き、時には印度政府の鉱物、金属輸出公団の役員に西ベンガル、ビハール及びオリッサ各州の鉱山を案内していただいた。約50種の鉱石標本を採取、その中Sillimanite, Kyanite, Chromite等13種の標本を資源工学教室に標本として送らせる様手配したが、輸出手続きに手間どっている中に例の印パ戦争が勃発してしまい一時はどうかと心配したがやっと先日教室に到着したので地質学教室に保管してある。好士の士はご覧になっていただきたい。

さて8月1日正午すぎに東京を発ったインド航空には中共行の学生が50人位、その他にインド旅行の日本人男女青年約80人、まさに若い者ばかりのチャーター機同然。これはインド政府が観光旅行者に対して、15人以上は全て交通費半額といった大サービスを開始したため、往復、途中の移動等にこの制度を利用することによって非常に格安に旅行できる。

同機はインド西部時間の真夜中12時にボンベイに着いたが、時差が3時間半あるので正味16時間位乗ったことになる。

税関は非常に厳重且つマンマンデーで延々2時間、特に刃物、カメラ、貴金属類に関しては厳重でカメラはナンバーを登録、出国の際にそれがないと、国内で売ったことにされて課税の対象となる。ボロタクシーに乗ってホテルに入ったのが2時すぎ。

ボンベイはカルカッタに次ぐインド第2の都会、元来ポルトガル領だったものが英国に譲渡され、さらに東インド会社に貸与されたところ。インド棉花の中心でもあり、かつ欧州(主として英国)とアフリカからの入口として発展した都市で、湾頭にはジョージ5世の来印を記念して建てられたとかいう凱旋門然としたGateway of Indiaが聳え、現在でも国賓を迎える際は儀式をおこなうというが、何も無い時には名物のヘビ使いが営業をしていて、写真をとると1ドルふんだくられる。

翌日ボンベイからジャイプール経由でニューデリーで乗換え一気にスリナガルまで飛ぶ。国内航空は主としてカラベル4型、例の時々落ちる奴で、その上、塔乗に際しての検査は厳重を極め、刃物、写真機は全部名札をつけてあずけ、着陸後に再び返して貰うシキタリというが、それが猛烈なボディチェックをやるわけで、まづ塔乗手続きを終った乗客は男女別に一列に並び幕を引いた小室に一人づつ入ってボディチェックを受けるわけだが、ウルサイのは女性が股間にピストルをかくしていることだそうで、特にカシミールは印パ両国が独立以来問題の地域で、いまだに国境線が確定しておらず停戦ラインの両側には両国軍隊が天幕を張ってニラミ合っている状態ではこれもある程度は致しかたあるまい。

スリナガルはヒマラヤとカラコルムの間にはひろがるカシミール高原の中心、元来インドの避暑地となっていたのが、印パ独立以来は紛争の地、それがなければアメリカヒッピ

一の基地と化してしまった感がある。

ダール湖上のハウスボートが宿泊には快適で、どこにいくにもシカラという小舟ののっていかねばならないが、観光ブームはこの山の中にまで侵入し、小生泊ったときには同じボートに日本人の僧侶、女子大生二人が泊っていた。この坊主がなかなかのナマグサで、日本からパンティストッキングなど大量に持って来て毎夜店を開いてセールスに大わらわ特に大戦中南方軍の主計少尉をしていたとかでインド人の気質をよく心得ていて売買とも上手なことこの上なし。他の女子大生二人は英語が丸でダメで、毎夜ボートにやってくる商人との通訳をさせられるのには往生した。特にカシミールはカシミヤの原産地、服地の安いと仕立代が1ドルしかかゝらないのとで、日本女性には大モテだが、その通訳をさせられるのには往生した。何しろ洋裁の言葉など日本語でも何というのかサッパリなので。これと困ったのは化粧品を買うのを手伝わされたこと、これも日本語でもマルッキリ知らないの。

カシミール大学は小舟に約30分のり、さらにクルマで20分位いったまきに花畑の真中とあったところ。キャンパスは花園の中に点々とあり、文、理、農学部をもっていて気候の関係で毎夏各種の学会が開かれるとのことであるが、環境といい誠にもって学問の府として快適なところだ。

この辺一带はムガル帝国の頃、歴代の皇帝が、広大な庭園を各所に作って四季の花をめめた処で、今でもスリナガルから片道10キロ以内の所に数ヶ所の庭園があって観光客の目を楽ませている一方、山側や溪谷にはキャンプを張って国境守備隊がパキスタン側と対峙しているといった硬軟両様の風景が各所に見られる。

スリナガルに一週間程いてニューデリーに飛ぶ。ニューデリーはインドの首府でもあり、珍らしくもないので、こゝでの行動につ

いてはスベテ割愛するが、ホコリの多い何もないところだとの印象しか残らない。同行のインドの役人がガンジー首相と会う約束をしているのでいかに誘われたが、コチトラは総理大臣になど何も用はないし、全くいく積りはなかったが、どうしてもというので一緒にいって見た。何の変哲もない中年婆さんで、何でもパキスタンからの難民が1000万近くも西ベンガルに入ってきており、インド政府は1日1ルピーの食糧を援助しなければならず、戦争しているよりも金がかゝるといって歎いていたが、これが今回の戦争の一因となっていることは間違いあるまい。

ニューデリーからカルカッタの対岸までインド唯一の空調寝台車にのる。8月10日にニューデリー駅を出て途中アグラ、カジュラホ、ペナレス、ブッダガヤで各一、二泊しながら17日にホーラ駅につく。

アグラには15世紀回教徒とヒンズー教徒が大決戦をしたアグラ城があり、見物客は象に乗って下から上までいくことができる。カジュラホは9～13世紀にかけてチャンドラ王朝の栄えたところで、石造の寺院の周囲を埋める石彫の群像は圧巻である。象、戦士、狩猟、楽隊などがあるが、矢張り我々の目を最も楽しませてくれるのは豊かな乳房を盛上らせ、腰をくねらせた天女と、男女が愛情を交えている極致を示すミトゥーナ像である。またこの駅ではヒンズーの性典カーマストラの英訳版を売っていたが、外国人にしか売らないそうで、スリナガル以来のナマグサ大僧正とともに購入し、夜行列車の中で勉強の材料にした。ペナレスはガンジス、ヴェルナ両河の合流点。インド名はヴェラナシというガンジス河岸には多くの火葬場があり、インド人は死んだらこゝで火葬にして灰を聖なる河に流されることを無上の光栄としており、火葬の場所には貧富の差はなく、金持は白檀の薪を使い、貧乏人は雑木の薪を使うとのことで、水浴場とこの火葬場だけはカメラを向けるこ

とが許されない。またこの大学はキャンパスの広さ世界一とかいわれ日本からも12人の僧が留学に来ているそうだ。中央の淡紅色のシヴォの大寺院は歴史的にはともかく見ごたえはある。ブッダガヤは仏教の聖地。大精舎は釈尊成道の地に建てられた高塔でインドではMahabodhi Temple（大菩提寺）といっており、アショカ王の創建という塔は現存せず、玉垣が最も古く、BC1世紀頃のものといわれている。こゝも多分に観光ズレしており、ノーキョー、ノーキョーといってジュズだの菩提樹の葉だのを売りつけにくる子供が多い。こゝで新知識をえたのは、ドイツにある菩提樹とは全然別種の植物であるということゝ、仏教の聖地として世界の仏教国が各々寺院を建立していることで、すでにタイ、セイロン、ビルマの寺は完成していたが、日本の寺院は仏教各宗の連合で目下建築中で宿舎だけが建っており尼僧を含む5～6人の僧侶が聖域で働らいていた。日本からの旅行者に対しては日本茶の接待をしてくれていたが、何しろ町から24キロ、人力車で2時間酷暑の下を走らねばならず一寸行くにも大変な処だ。日本の僧侶の話によると買物は毎日一本の夜行列車に乗ってカルカッタまでいかねばならないとのことで、最も不便を感じているのは医者とクスリだそうで、小生も手持のクスリを全部使用法とともにお布施がわりに置いてきた次第である。

ガヤ駅を午後10時半に出た汽車は約6時間おくれて、翌日正午にカルカッタの対岸の町に着いたが、この汽車寝台車だけは冷房してあるが食堂車には冷房がなく、その上列車は通路で連絡してないので、食堂に行くには停った駅でホームを走っていき、食事をすませると次の駅で走って自室に帰るといった状態でその間2時間でも3時間でも暑い食堂車で頑張っておらねばならず、その上食事がマズイのとキタナイのにはウンザリした。インドはどこを旅しても不潔なことを気にしていた



ら歩くことなど出来ず、国民4億というが恐らくその中の1億は乞食であろうと推察する。

この汽車の中で珍しい人物に会った。途中で一輛の客車のジェネレータが参ってしまったので冷房がきかなくなり、その車輦に乗っていた乗客を他の客車に移したため、小生一人で占領していたキャビンにも車掌がインド人を案内して来て入れてくれという。誰だと聞いたら車掌の後からついてきた大男が「ミー」だということで、兎に角「入れ」といって相容になる。この男、大の反英家で英国の大学に留学するのが常識のこの国でドイツに留学、戦争中は南方軍の衛生部にあってビルマにいたという。日本語をすこし話し、ビルマに長いというので先輩のウー・カー氏のことを聞いてみたら矢張り知っていて、彼は目下タイの山中で反ビルマ政府軍の訓練をやっているとのことで、ビルマ右翼の総師的存在とのこと。

ブダガヤからカルカッタまでの駅はホーム全体が何処も東パキスタン難民によって占領され早朝になるとインド軍のトラックがきて難民キャンプに送るといった仕事我每天続けられているが、その数1000万では如何ともしがたいというのが本当のところではないだろうか？

駅からホテルまでの間も、避難民の大群集。インド当局の話では、近い(徒歩20分位)が歩いてはいけないということで自動車にした。暑い真夏のインドをクーラーもなく、窓も開けられず全くの焦熱地獄の中を2時間かかった。

ホテルでも外国人の部屋には巡査が一人づつついているが、これが服装ではボーイと区別がつかず、間違えて「お茶を持って来い」といったら「イエース」といって持ってきた。チップをやったら、彼、胸をはって俺はポリスだからチップはいらないといった。この国はカースト制で、ホテルでもボーイが各室に5人位ついている。列車にも車掌4人、夫々

の任務が違って階級もあり、チップなどやる場合非常に面倒くさい。

またこの国にはヨーロッパはなくすべてイングリッシュである。ウェスタンとかヨーロッパとかいった形容詞は絶対に使用せず、すべてがイングリッシュである。昔の親方ともなると成程大したものだと感心した。

最後に約2週間のインド旅行で最も印象に残ったことを述べておくと

1.人口が余りにも多く、政府予算の可成りの部分が人口問題に消費されていること。政府は勿論国連でも熱心にファミリープランについて啓蒙に心掛け、マンガ、ポスターなどあらゆる宣伝方法で知識の普及につとめ併せて、経口避妊薬の服用を奨励し、無償で一週間分づつ配給している。彼女達はその使用方法についていくら教えられても、貰った一週間分を一度に服用してしまうために一向にその効果が出てこないばかりか副作用といった反作用まで出てきているとニューデリーで会ったWHOの駐在員がこぼしていた。

その多い人口4億の中、小生の推定によると約1/4すなわち1億近くが乞食といってもよい程度の生活ぶり、一体いつになったら、少しはマシな生活ができるようになるかということに大きな疑問を感じた。何しろ一家族一日邦貨50円もあれば生活できるとの話は、タクシー一日借切って米貨5ドル、人力車1〜2ドルといった状態と、前述の婦人服の仕立代一着分1ドルということを想起して貰えば、生活費が安上りだなんてことで割切ことは極めて危険というものであろう。

2.歩いた処が偶然そうだったのかも知れないが、カシミールを除いては、どこも砂漠とハゲ山の連続、作物はできずその上、雨が少なく、降れば降るで1度に500〜600mm以上にも達し、洪水は慢性化し、昨夏もガンジスおよびその支流の下流一帯は大洪水で、汽車はおろかバスも通せず、致し方なくハダカ馬に乗って旅したことも一再ならずあったし、

その途中には貨物を満載したトラックがエンコしており、何時ともわからない減水を待っている有様は実に何とも名状し難い風景であった。

3. 動物に対する偏った愛護精神は食糧不足の一部を解決すべく国連加盟国から有償無償で贈られた米麦類をことごとく牛に食わせてしまう。印度では牛が神様の化身とされており人間よりも遙かに大事にされる。従って車道に牛が臥ていたりなどすると、電車もバスも手前で一旦停止、お牛様がお引取りなさるまではいつまでも待つという寸法。これはフットボール競技場内に牛が散歩にくると試合を中断し、牛の出るのをお待ち申し上げるといったことにもあらわれている。その故に人間の食糧を牛に与えるなどは当然で何の抵抗も感じないばかりか、牛肉を食うことは習慣的にも禁じられており、ビーフといえは水牛の肉をさす。万年食糧不足は簡単に解決できる問題ではなさそうだ。

4. この国の社交クラブは水泳クラブとなっており、これは英国のクリケットクラブ、北欧のヨットクラブ、南米のフットボールクラブと同じ意味に使われている。水泳クラブといっても、レストラン、各種の運動競技施設なども備えた総合社交クラブである。カルカッタで一日西ベンガル州の鉱業長官が接待してくれたが、素足に白ズボン姿、カッターシャツにゴム草履をはき、インド国産のアンバサダーという小型自動車にのせられたが、丁度ソ連のモスクビッチにそっくりの車で、あるいはソ連の技術援助を受けているのかも知れない。

#### —— 札幌狸小路で資源同窓会 ——

46年度日本鉱業会秋季大会は札幌市で9月24日から26日まで開催された。本年は気象異変が多く夏季の北海道は例年になく涼し過ぎ米作は平年の50%程度と言われる位の

冷害。我々もかなりの涼しさを予想して渡道したが、幸にして大会の前半は爽やかな秋気に包まれ、むしろ東京などよりも暖かい位であった。

さて大会には全国各地から500名以上の参加者があった。名簿によると我が資源工学科出身者の名前もかなり見え、現に会場でも親しい顔がちらほら眼についた。石炭技研の西村光一君の発案で、折角の機会だから一夕の集いを持つてはないかということになり、大会第1日の24日夕刻、札幌市南2条西6丁目いわゆる狸小路の一角にある郷土料理店「なかむら」で資源同窓会を開くことにした。

何しろ急にきめたことなので、メモに会場・時間・主旨などを書いて数人で手わけして同窓諸士を勧誘した次第である。しかし会社関係の先約があるため残念ながら参加できないという方もあったが、会場で会えた大部分の同窓生の参加を得て、さきやかではあるが心のかよったなごやかな一夕を過ごすことができた。47年度秋季大会は熊本市で10月8日(日)から10日(火)まで3日間開催されることになっているので、この際にはあらかじめ会場、時間などを定めておいて我々資源の同窓会を開きたいと思います。万障繰合せて多数の参加を期待します。なお、札幌同窓会の参加者は次の11名です。(N. F. 記)

萩原義一(19採教室)、房村信雄(20採教室)、西村光一(25採石炭技研)、橋本文作(26採教室)、種田啓二(26鉱防衛技研)、岩崎孝(28鉱教室)、田中清治(36鉱研究室)、村原正隆(44資大学院)、三宅正志(45資三菱商事)、奥野正晴(46資日鉱)、楠建一郎(46資大学院)

#### 昭和46年度の資源工学科教室

4月、3日入学式、5日始業式、7～8日本庄において新入生オリエンテーション、12日授業開始。

- 5月. 29, 30日 早慶戦。
- 6月. 5日理工スポーツ大会。
- 7月. 16～24日前期末試験, 試験終了後8月にかけて3年生現場実習, 事故なく無事終了, 情勢の変化により実習受入鉱山数激減, 実習の存続につき問題が生じた。  
22日より石油の海洋開発事情視察のため伏見教授台湾に出張。
- 9月. 4日伏見教授帰国, 20日後期授業開始。  
25日伏見教授鉱業技術指導のためキューバに出張, 30日2月より西独留学中だった山崎純夫教授帰国。
- 10月. 11日伏見教授帰国別掲のように多くの収穫を得られた。17日, 22日大学院1次, 2次入試, 合格発表29日。なお大学院推薦者の合格発表は15日, 21日大学創立記念日。
- 11月. 2～8日早稲田祭, 理工展は中止。  
18日学費値上発表のため学内騒然, 理工構内で革マル・民青衝突, 火焰瓶投げらる。20日理工1週間スト決定。
- 12月. 9日一部学生学部長室に侵入, 小林教務主任つるし上げ, 13日冬季休業に入るとともに学内静まる。13～14日実習報告会。
- 1月. 8日冬季休業終了, 10日より授業開始。  
21日直良先生最終講義。27日授業終了。  
28日より学年末試験始まる。一部学生の妨害に備え試験実施の緊急態勢をつくる。心配された妨害なし。
- 2月. 10日試験終了。29日理工入試。
- 3月. 8日入試合格発表。25日卒業式。

### 直良信夫先生古稀記念事業

昭和7年御奉職以来, 本学科をはじめ文学部などで多くの学生を教え育んでこられた直良先生は, 今回古稀を迎えられるとともに今年3月大学を停年退職されることになりました。先生の古稀をお祝し, 御停年を記念するために, 別紙の通り記念事業が計画されています。会員各位には趣旨に御賛同の上事業に御協力下さるようお願いいたします。

### 逝去者

下記の方々が昭和46年中に逝去されました。つつしんで御冥福をお祈り申し上げます。

三宅当時(旧教授) 46. 3. 27 逝去

連絡先: 練馬区中村南 3-18

Tel (990) 9374

徳永もと(故徳永教授未亡人) 46. 9. 26 逝去

連絡先: 新宿区百人町 2-17-17

Tel (369) 6274

### 編集後記

本号は昨年中に発行の予定だったが, 編集子の不勉強のため大巾に遅れたことをお詫びする。三宅先生が逝かれ, 今回また直良先生が停年退職され, 古くからの教室関係者が年々少なくなっていくのは淋しい限りである。しかし, その反面若い会員の方々の活躍の様子がいろいろ伝えられ, 本会の発展のためにも喜ばしい。学費値上反対の斗争が全国的に盛んな現情で, 今後どのように経過するのか心配である。本号には会員諸氏の投稿が少なかったが, 今後会員交流の場としてますます会誌を利用していただくようお願いする。

資源工学会

東京都新宿区西大久保 4-170 電話 (209) 3211

早稲田大学理工学部資源工学科内 内線(仮) 383

郵便番号 160 振替番号 東京 143534 (非売品)